

## 「神の自由」をめぐるアウグスティヌスの理解 —「書簡」186と「書簡」194を中心に<sup>(1)</sup>—

菊 地 伸 二

### はじめに

アウグスティヌスは、その生涯の最後の約20年間を、ペラギウス及びその主義者との論争に費やした。人間が救済されるために、人間が有する自由意思はどのような働きをするか、ということをめぐる見解の対立が両者の争点の中心にはあった。

アウグスティヌスは、その青年時代に、二元論的なマニ教の教えに深く影響を受け、およそ9年間そこに留まった。やがて、そこから脱げていくのであるが、そのうえで、人間が有する自由意思の存在は極めて重要な意味を持っていた。かれは、司祭職になる前に、この問題と取り組み始め、司祭職に叙任されてから完成した『自由意思』は、いわゆるマニ教を反駁することを目的として書かれたものであった。

この作品は、人間における自由意思の働きを重視したことから、ペラギウス及びその主義者から高く評価されることになるのであるが、とりわけ人間の救済との関わりにおいて、果たして自由意思はどのような働きをするのか、そもそも、自由意思は神による救済において、何らかの有効な働きをすることができるのかということをめぐることは、アウグスティヌスは、ペラギウス及びその主義者とは見解を異にせざるを得なかった。

ところで、長年にわたるペラギウス及びその主義者との論争は、論争した相手の変化に伴い、時期的に三つに分けて考えることが可能である<sup>(2)</sup>。

(1) ペラギウス・カエレスティウスとの論争 (412—419年)

(2) ユリアヌスとの論争 (419—430年)

(3) セミペラギウス主義者との問題 (426—430年)

(1) の時期には、カエレスティウスの見解に間接的に答えた『罪の報いと赦し、幼児洗礼について』、『霊と文字』(412年)、また、『自然について』の反論として『自然と恩恵』(413年)が、ま

た『キリストの恩恵と原罪』(418年)が執筆される。なお、418年のカルタゴ会議において、ペラギウスに対する断罪が行われる。

(2) の時期には、エクランムのペラギウス主義者である司教ユリアヌスとの論争が始まるが、その主たる作品は『ユリアヌス駁論』(421年)であり、さらに『未完書・ユリアヌス駁論』(429年)が著される。

(3) の時期は(2)の時期に含まれるが、『恩恵と自由意思』『譴責と恩恵』『聖徒の予定』『堅忍の賜物』が叙述される。セミペラギウス主義者については、(1)(2)のペラギウス及びその主義者と一線を画す必要があるものの、一応、その延長上にある考え方と見なすことは可能である。

さて本論では、二つの書簡を取り上げる。具体的には、「書簡」186と「書簡」194であるが、これらの作品は、三つの時期で言うと(1)に該当する。ただ、この二つの書簡は、いわゆるペラギウス及びその主義者に対して反駁の意図をもって執筆されたものではなく、ペラギウス主義について、同僚の司教、司祭に宛てて執筆されたものである。いずれも、時期的には416年から418年にかけての作品であると言われている。互いの宛先は異なるが、両者に対して、ペラギウス主義の問題点を丁寧に説明している点では共通しており、この時期のアウグスティヌスのペラギウス及びその主義者に対する理解を知る上では、非常に貴重な資料であることは確かである。

また、ペラギウス及びその主義者が、もっぱら人間の有する自由の問題だけを考慮しているのに対して、アウグスティヌスが、人間の有する自由という問題について、徹底的に、神との関わりから検討しようとしていること、さらに言うならば、神の有する自由という視点を保持しながら検討しようとしていることが大いに注目されることである。

本論では、ペラギウス及びその主義者との論争

を通して、アウグスティヌスの中で、いよいよ輪郭をあらわにすることとなった「神の自由」の問題について考察することにした。

なお、本論の構成については、以下の順序で、執筆を進めていくことにする。

1. 「書簡」186について
2. 「書簡」194について
3. 二つの書簡の比較  
おわりに

## 1. 「書簡」186について

それではまず、「書簡」186について、その執筆の経緯、宛先等の執筆をめぐる諸事情について述べることにしよう。

### (1) 執筆をめぐる

本書簡は、416年の中頃に、タガステの司教アリピウスとアウグスティヌスが、イタリアのノラの司教であるパウリヌスに宛てて執筆した書簡である。パウリヌス自身、かつてペラギウスと親交を有しており、また、ノラにはペラギウスの信奉者が多数いることもあり、司教という立場上、それを見極めることの重要性を指摘しながら、ペラギウス及びその主義者についての危険性を綴った書簡である。ペラギウスは会議では自らの見解を撤回したものの、その実は定かではなく、むしろ、もっとも新しいかれの著作を見る限り、自らの見解を保持し続けていると思われる、というのがアウグスティヌスの見方であると言ってよいであろう。

### (2) 「書簡」186の概要

さて、「書簡」186の全体は十二章から構成されている。

第1章では、アウグスティヌスの「書簡」を記した相手である司教パウリヌスが、ペラギウスを神の僕として愛していたことが語られている。アウグスティヌスもまた、かつては、ペラギウスのことを自分と同じ信仰を有している者として愛していたが、今では、同じ信仰を有する者ではなく、神の恩恵に敵対する者として見なしていることを語っている。そのことのきっかけとなったのは、ペラギウスの弟子たちによって『自然について』という著作が手渡されたことによる。アウグスティヌスは、これに対して、『自然と恩恵』と

いう著作をもって反論することになる。

ペラギウスは、「意思したり行為したりする能力が、それなしにはわたしたちはどんな善も意思したり行ったりできないのであるが、創造者によってわたしたちの内に植え付けられていると主張し」(1,1)、そのことによって、救済者の到来の意味が無効にされてしまう(1,2)ことに反論していると言える。より詳しく言うならば、「わたしたちの主イエス・キリストによる神の恩恵は、罪をぬぐい去るばかりか、罪を犯さないで正しく生きるために意思の決定力をすでに使用できる人々たちを助けることによって、最初の人間の死から第二の人間の生命に幼児も大人もいっしょに移しています。それゆえ、この恩恵の援助なしには、行為においても、意思自体においても、わたしたちは何らかの敬虔と義をもつことができません」(1,3)ということになる。

第2章では、「かれが恩恵によって義とされる前は、つまり義人とされる前は、罪人は罪人以外の何なのですか。かれに当然支払われるべきものが報われたのであれば、かれの功績によっては罰以外の何が報われたのですか。…なぜなら当然支払われるべきものは行いに対して支払われますが、恩恵は無償で授けられるのです。この無償(グラチス)ということからして恩恵(グラティア)と呼ばれるのです」(2,6)とされている。

第3章では、「神を信じるようにまず初めにわたしたちを愛してくださったお方を、その恩恵を通してわたしたちは愛しており、何のわざも行わなかったわたしたちが神によって愛されているのです」(3,7)とされている。また、「こうしてわたしたちは、律法による義をもつのではなく、キリストに対する信仰による義をもつ者としてキリストのうちに見出されます。神から来るこの義は信仰の内にあり、それによって神の義がわたしたちに与えられる信仰の内に確かにありますが、わたしたちの力によって自分の内にわたしたちから生じるのではない」(3,8)と主張することにより、わたしたちの有する信仰も神によってもたらされることが強調されている。

信仰の義認ということに関しても次のように言われている。「信仰が義認を獲得するとき、人間の功績の何かが神の恩恵に先行しないで、恩恵そ

のものが増大するように報われるのです。それはひとたび恩恵が増大すると、完成されるように報われますが、その際、意思が伴われていますが、それは導くのではなく、付き従うのであり、先導するものではありません」と。

アウグスティヌスは、ここで、人間の側の先導性を否定するのであるが、このようにして、「かれは敬虔と信仰にもとづいて、そこからすべての善がかれに来るお方を知ること以外には、またこの善が自分自身に由来しないし、それが神に由来しないなら、このことも起こりえないことを知ること以外の他の方法によっては、いっそう多くの恩恵を受けるにふさわしくないのです」と言われ、「人間の功績自体も無償の贈物であり、そこからすべての最善の賜物が降ってくる光の父から、誰も受けるに値しないものを受ける以外には、何らかの善を受けるに値していません」と結ばれるのである (3,10)。

第4章では、これまで述べられてきたことが、とりわけ、幼児の場合に当てはまることを示そうとしている。これに対しても、ペラギウス主義者たちは、「幼児たちを個人的な罪のかどで被告として立て、善も悪も考えることができない者らが自由意思によって罰や恩恵が報われることができると見なそうとしている」(4,12) ののである。

第5章では、「エサウとヤコブ」をめぐるペラギウス主義者の理解とアウグスティヌスの理解とが対比的に述べられる。アウグスティヌスの理解は、基本的には、使徒パウロの理解に従うものであり、「兄は弟に仕えるであろう」と語られたのは、行いによってではなく、お召しになるお方によって神の計画が選びにしたがって語られたことであると述べられるのである。

第6章では、引き続き、「エサウとヤコブ」についての言及がなされており、併せて、パウロの「ローマの信徒への手紙」第9章についてのアウグスティヌスの理解が示されている。「神がその愛によって行為の功績が識別されない者たちを識別する場合、神のもとに不正はないか」というペラギウス主義者の疑念に対しては、「わたしは自分が憐れもうとする者を憐れみ、慈しもうとする者を慈しむ」という使徒の言葉をもって答えようとする。

また、「最初の人間の自由意思によって、塊のすべてが断罪に向かって落下したなら、そこから貴い器に作られることは、疑いの余地なく、恩恵に先行しなかった自己の義に属さず、神の憐みに属しています。とはいえ、いやしい器に作られることは、神のもとには絶対にない神の不義に属さず、神の裁きに属すると判断しなくてはなりません」(6,18)と言われ、カトリックの教えが改めて確認されるのである。

第7章では、「ローマの信徒への手紙」第9章の、とくに20—23節の言葉をめぐって話が展開されるとともに、同じく8章の「予定と予知」の問題についても言及がなされる。

第8章では、パレスチナの司教会議における判決と、その後のペラギウスについての動きについて言及されており、その当時の様子が窺い知れる箇所でもある。

第9章では、その会議において断罪された説が具体的に語られており、ペラギウスもそれに同意をしたと言われるものである(ただ、アウグスティヌスはその同意が本意なものであると見ている)。ともあれ、いわゆるペラギウス主義者の主張を知る上では重要な箇所と言える。

第10章では、ペラギウスについては、「意思の力を、時折、罪を犯すことができると同じく罪を犯さないこともできるというように、等しい重さによる天秤の皿によって評価している」とアウグスティヌスは述べている。アウグスティヌスによれば、ペラギウスは、「人間に恩恵が与えられるのは、自由意思によって実行するように命じられていることを、恩恵によっていっそう容易に表現することでできるため」と考えているのであり、「いっそう容易に」という表現は、恩恵が欠けていても神によって命じられていることを、自由意思によって、容易に、あるいはやっとのことで、実現できるということが含意されているのである。これに対して、アウグスティヌスは、「ローマの信徒への手紙」の「それは人の意思や努力によるのではなく、神の憐みによる」(9,16)の箇所を対置させるのである。

第11章では、ペラギウス主義者の主張が、パウロが「かれらは神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかった」としている

ユダヤ人に類似していることを指摘されている。

第12章では、この書簡の送り手であるパウリヌスの主張は、たしかにかつてはペラギウスの主張に類似しているという噂がたっていたものの、その言葉からは、むしろ、その主張に対立するものであることが述べられている。

### (3) 「書簡」186におけるペラギウス主義批判

アウグスティヌスは、ペラギウス及びその主義者に対してなぜ批判するのであろうか。どのような点を批判しているのであろうか。

「書簡」186では、まず、ペラギウスが『自然について』を執筆したことに対して、それを批判するために『自然と恩恵』という作品をアウグスティヌスが書いたことが言われている。アウグスティヌスとペラギウス（及びペラギウス主義者）の間で、もっとも違う点は、恩恵に対する理解と言ってよいであろう。

ペラギウスのように、「意思したり行為したりする能力が……創造者によってわたしたちの内に植え付けられている」(第1章)と主張するならば、恩恵の働く部分は非常に限られてしまい、いわば、恩恵の働きは矮小化されることになる。それは、アウグスティヌスによれば、何よりもキリストの到来を無意味なことにすることであった(第2章)。

ペラギウスは、恩恵という言葉は用いるとしても、それは、事実上、自然(本性)のうちに吸収されるか、そうまで言わないとしても、自然(本性)の働きを「いっそう容易にする」(第10章)、いわば、補助的手段のように見なしている、とアウグスティヌスの目には映っていたと思われる。

人間の本性の働きを肯定的に捉え、それを重視する立場からすれば、その働きの延長上に、すなわち、働きの報い、功績として位置づけられるのが、恩恵ということになり、それ以外の恩恵理解は難しいと言わなくてはならないであろう。

アウグスティヌスにおいては、キリストの到来による、徹底的な人間に対する救済の出発点として恩恵について捉えようとしており、恩恵の恩恵性、すなわち、その無償性ということに何よりの力点を置いている。「恩恵」を意味するグラティアという言葉は、「無償に」を意味するグラティスに由来すると説明している(第3章)。信仰(信

ずる心)は人間の意思に出発点を置くという見方も可能かもしれないが、その信仰それ自体も神によって与えられることが確認される(第3章)。

「ローマの信徒への手紙」第9章に記されている「エサウとヤコブ」の例からは、二人の行いに基づいて、神は判断したわけではけっしてなく、人間をお召しになるお方の選びによるものであることが確認される(第5章、第6章)。また、「自分が憐れもうとする者を憐れみ、慈しもうとする者を慈しむ神」(第6章)がある人間を選ぶ、という神の裁きについては、その自由性が何よりも強調されることになる。

「意思の力を、時折、罪を犯すことができると同じく罪を犯さないこともできるというように、等しい重さによる天秤の皿によって評価している」というのが、アウグスティヌスから見たペラギウス主義に対する批判でもある(第10章)。人間は、善悪を選択することにおいても、中立的な立場に身を置きながら判断できる、というペラギウスの主張は、人間のみにあって義を求めることが可能であるとする発想であり、そこには、神によって人間が義とされていく、という発想が見られない(第11章)ことが大きな不満点なのではないだろうか。

## 2. 「書簡」194について

それでは次に「書簡」194について、その執筆の経緯、宛先等の執筆をめぐる諸事情について述べることにしよう。

### (1) 執筆をめぐる

本書簡は、418年頃に、アウグスティヌスがローマの司祭であるシクストゥスに宛てた書簡である。シクストゥスについては、かつてペラギウス主義の見解を有していたという疑義が生じており、さらに自分自身も、自らのうちに、ペラギウス主義的な要素はないかということに不安に思い、アウグスティヌスに判断を仰ぐ書簡を送っている。それに対する詳細の返信が本書簡であり、この中でアウグスティヌスは、シクストゥスの見解は、ペラギウス主義に傾いているどころか、全くその反対にあることを述べている。

アウグスティヌスの書簡を送った相手のシクストゥスは、後に、教皇シクストゥス3世となる人

物である。なお、この書簡は、後に、セミペラギウス主義論争を引き起こす引き金となる書簡であることもここで記憶しておきたい。

## (2)「書簡」194の概要

「書簡」194の全体は十章から構成されている。

第1章では、ローマの司祭であるシクストゥスが、自分がペラギウス主義の考え方に傾いていないかと心配して、アウグスティヌスに対して問い合わせの書簡を送ってきたことに対して、そのようなことは全くない、という主張をすることによって、その返書として書かれたものであることが記されている。また、そのこととともに、現在もなお、ペラギウス主義者は存在しており、その表明の仕方には違いがあるものの、それらに対応することが必要であることが述べられている。

第2章では、ペラギウス主義者が主張しようとしていること、たとえば、「もし神の助けなしには、人は善い意思を持つことがないとしたならば、自由意思は取り除かれてしまうのではないか」ということ、「同一の状態においてある人が自由にされ、他の人が罰せられるのは正しくない」ということ、こうした主張が誤りであることが述べられている。

第3章では、ペラギウス主義者は、自らの義、功績を先行させる者であり、恩恵の危険な敵であることが言われている。たしかに、ペラギウスは、パレスチナの教会法廷で、功績によって神の恩恵が与えられると主張する人たちを破門にしたものの、その理由として、アウグスティヌスは、そのようにしないと、かれは罰を受けずにそこから立ち去ることができなかったからである、と考えており、じっさい、その後の諸々の討論において、功績に基づいて恩恵が与えられるという主張しか見出されないと述べている。かれによれば、何ら先行する功績を伴わない恩恵とは、わたしたちが創造された人間の本性であるとみなしているのである。

これに対して、アウグスティヌスが主張する恩恵とは、わたしたちが悪人であったとき、それによってわたしたちが義とされる恩恵のことを意味しており、それは主イエス・キリストによる恩恵に他ならないのである。

また、信仰についても、それ自体を、ペラギウ

ス主義者のように、人間の意思決定に帰することはできないし、また、何らかの善い功績が信仰から始まるので、信仰自体を何らかの先行する功績に帰することもできないのである。また、信仰はわたしたちをキリストに引き寄せるものであるが、それは無償の賜物として上からわたしたちに与えられたものなのである。信仰が先行し、そこに恩恵に対する功績があると言うならば、信仰を受け取るために、人は信仰以前にどんな功績をもっていたのかが疑問として残る。

第4章では、祈り自体も恩恵の贈り物の中に数えられるべきであることが言われている。

第5章では、永遠のいのちについて取り上げられており、このことについても、もし人間であるあなたが永遠のいのちを受け取るならば、それは義の報いであっても、それはあなたにとって恩恵である。なぜなら、義そのものがあなたにとっては恩恵であると言われている。

第6章では、「ローマの信徒への手紙」第9章(20—23)を中心に、かれの論が展開されている。

キリスト者はわたしたちの主イエス・キリストによる無償の憐れみによってでないならば、神はだれも自由としないし、同じわたしたちの主イエス・キリストによるもっとも公正な真理によってでなければ、だれも罪に定めないことを知っているか信じている。しかし、どうしてある人ではなく、他の人を自由としたり、自由としなかったりするののか、ということについては、それができる人に神の裁きのこんなにも大きな深淵を探索させておきなさいと述べている。また、主は、単にわたしたちの罪を赦すだけでなく、それに先立って神に対する信仰と畏怖を吹き込み、わたしたちの無気力のすべてを癒し、わたしたちの生活を墮落から贖いだし、憐憫と憐れみをもってわたしたちを花冠で飾るまで、救われるように祈ろうとする意思とその実現とを授けると記されている。

第7章では、幼児についての言及がなされ、とくに、ペラギウス主義者も、水と聖霊によって再生しないならば、幼児は決して天国に入らないということをいかなる異議もなく認めていることを指摘している。

第8章では、「ローマの信徒への手紙」に記されている「ヤコブとエサウ」の例が引き合いに出

されている。この「恩恵の選び」については、選びというのは、神がそれを見出したのではなく、神がそれによって選ばれるべき者と見なした選びであり、神はかれらの行ないによってではなく、神の呼びかけによって、「兄は弟に仕えるだろう」と語ったと言われている。また、このようにして、ヤコブは、共通の状況を分かち合っていたかれの兄弟が義によって断罪されるに値していたことを見ると、恩恵によってのみ自分が根源的な不義の塊から分けられえたことを理解したとも述べている。

第9章では、将来長く生きていたら、善く生きるか、あるいは悪く生きるかしたことであろう、そのことによって神は配慮するのではないか、という見解に対して、批判がなされている。

最後に第10章では、ペラギウス主義者たちも幼児洗礼の必要性を認めていることを再度述べながら、その危険性を指摘しつつ、書簡全体を閉じている。

### (3) 「書簡」194におけるペラギウス主義批判

アウグスティヌスは、この書簡において、ペラギウス主義のどのような点を批判しているのだろうか。

第2章では、ペラギウス主義の主張として、「もし神の助けなしには、人は善い意思を持つことができないとしたならば、自由意思は取り除かれてしまうのではないか」ということと、「同一の状態においてある人が自由にされ、他の人が罰せられるのは正しくない」ということを取り上げ、そのいずれもが誤りであることを述べている。前者の主張は、神の恩恵と人間の自由意思を切り離して捉える、あるいは、同じ地平上で捉えることから生ずる誤りであると言えるであろう。また、後者の主張については、神の領分にあることがらを、人間の側から発言することに対する誤りの指摘であり、これは、ペラギウス主義が、人間の側からのみ問題を捉えようとして、神の側から捉えられていないことの誤りを指摘していると言うことができるであろう。

この書簡においても、ペラギウス主義は、人間の功績を先行させ、その結果として、恩恵が捉えられていることを指摘している（第3章）。また、アウグスティヌスにおいては、その出発点にある

キリストによる恩恵の問題が、ペラギウス主義においては顧慮されていない点が述べられている（第3章）。さらには、信仰そのものもまた無償の賜物であり（第3章）、そればかりか、祈りそれ自体も恩恵の贈物である（第3章）であることが言われ、これらの主張は、後に、セミペラギウス主義論争を引き起こすことになる火種とも関係しているように思われる。

第4章では、永遠のいのちが問題となり、それが義の報いであるとしても、義そのものが恩恵の賜物であることが主張される。これもまた、セミペラギウス主義論争において扱われる作品の中で展開されることである。

「ある人を自由にし、ある人を自由にしない」のは、正しく神の裁きであること、また、「ローマの信徒への手紙」第9章から「エサウとヤコブ」の箇所が引用され、それが、神の召しという形での選びであることが述べられている（第8章）。

## 3. 二つの書簡の比較

以上、「書簡」186と「書簡」194の執筆状況と概要、そして各々の書簡におけるペラギウス主義批判について見てきたが、ここでは、二つの書簡を比較して考察することにした。

### (1) 「ローマの信徒への手紙」をめぐる

アウグスティヌスにおいて、人間の自由意思と神の恩恵の関係を考察する上で、とりわけ重要な意味を有していた聖書の作品として「ローマの信徒への手紙」を上げることができる。

自由意思と恩恵の関係について大きな変化が起こったと言われる396年の『シンプリキアヌスへの返書』でも、扱われていたのは、「ローマの信徒への手紙」であり、しかもその第9章をめぐる解釈であった。アウグスティヌスにとって、「ローマの信徒への手紙」第9章は、その意味で、特別な箇所と言ってもよいであろう。ペラギウス及びその主義者との見解の相違を説明する上でも、この箇所が重要であることについては、改めて説明は不要であろう。じっさい、この二つの書簡においても、「ローマの信徒への手紙」からの引用は、その大きな部分を占めていると言ってよい。

さて、それでは、「ローマの信徒への手紙」はどのような文章になっているのか。「ローマの信

徒への手紙」第9章の、とくに、6—23節について、日本語の新共同訳によれば次の通りである。

- 6 ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません。  
イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、
- 7 また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない。  
かえって、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」
- 8 すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。
- 9 約束の言葉は、「来年の今ごろに、わたしは来る。そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。
- 10 それだけではなく、リベカが、一人の人、つまりわたしたちの父イサクによって身ごもった場合にも、同じことが言えます。
- 11—12 その子供たちがまだ生まれもせず、善いことも悪いこともしていないのに、「兄は弟に仕えるであろう」とリベカに告げられました。それは、自由な選りによる神の計画が人の行いにはよらず、お召しになる方によって進められるためでした。
- 13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書いてあるとおりです。
- 14 では、どういうことになるのか。神に不義があるのか。決してそうではない。
- 15 神はモーセに、「わたしは自分が憐れもうと思う者を憐れみ、慈しもうと思う者を慈しむ」と言っておられます。
- 16 従って、これは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるものです。
- 17 聖書にはファラオについて、「わたしがあなたを立てたのは、あなたによってわたしの力を現し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである」と書いてあります。
- 18 このように、神は御自分が憐れみたいと思う者を憐れみ、かたくなにしたいと思う者のかたくなにされるのです。
- 19 ところで、あなたは言うでしょう。「ではなぜ、神はなおも人を責められるのだろう

か。だれが神の御心に逆らうことができようか」と。

- 20 人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、「どうしてわたしをこのように造ったのか」と言えるでしょうか。
- 21 焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのではないか。
- 22 神はその怒りを示し、その力を知らせようとしておられたが、怒りの器として滅びることになっていた者たちを寛大な心で耐え忍ばれたとすれば、
- 23 それも、憐れみの器として栄光を与えようと準備しておられた者たちに、御自分の豊かな栄光をお示しになるためであったとすれば、どうでしょう。

太い黒字にした部分は、この二つの書簡において、とくに重要な意味を持っていると考えられる箇所である。ペラギウス主義は、あくまでも人間の意思の働きを重視しており、その功績として神の恩恵を考えようとしている。最終的には、神による贈物ということにはなるが、それを規定するのは、人間の側の意思であり努力である、ということになる。したがってそこには、神の自由な判断が働く余地はないのである。

16節の「従って、これは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるものです」という言葉は、アウグスティヌスの恩恵論の確立にとって決定的に重要な意味を持つ言葉であると考えられるが、それは同時に、アウグスティヌスとペラギウス主義を徹底的に分かつ箇所であると言ってもよいであろう。その前後の箇所には、ペラギウス主義が真正面から扱うことができない神の自由の領域が十分に展開されているのである。

## (2) 神の自由について

ところで、二つの書簡には、「ローマの信徒への手紙」をベースにしながら論を展開しているという共通点以外にも、信仰そのものも恩恵である、という主張がなされていたり、キリストによる恩恵の持つ重要性が指摘されていたりするなど、いくつかの類似点が見い出される。両者の書簡には、執筆の上で、約二年間の隔りがあるが、そこに

安易にペラギウス主義に対する批判の深まりを読み込むことについては慎重でなくてはならない。とくに、書簡の場合には、執筆状況や宛先が異なっているということもその理由の一つである。

ただ、神の恩恵については、後者の作品においては、前者の作品にはない、永遠のいのちの問題が扱われており、恩恵が終わりの時まで働き続けることが言われていたり、同様に、後者の作品においては、前者の作品において言われていた信仰それ自体ばかりでなく、祈りそれ自体についても言及がなされており、それが恩恵の賜物であることが言われていたりするなど、恩恵の理解については、より一層深まりを見せているという印象を持つことも確かである。

「主は、単にわたしたちの罪を赦すだけでなく、それに先立って神に対する信仰と畏怖を吹き込み、わたしたちの無気力のすべてを癒し、わたしたちの生活を墮落から贖いだし、憐憫と憐れみをもってわたしたちを花冠で飾るまで、救われるように祈ろうとする意思とその実現とを授ける」（『書簡』194（第6章））という言葉は、まさしく神の恩恵が、人間の救済の全過程に関わっていることを示していると言ってよいであろう。

このようにして、ペラギウス主義を批判する中で、アウグスティヌスは、神の恩恵の奥行きをますます見つめる中で、神の有する自由という問題についても思索を深めていったことは否めないことであろう。

## おわりに

これまで、わたしたちは、アウグスティヌスが、ペラギウス主義を批判する中で、神の恩恵の問題を深化させ、それを通して、ペラギウス主義においては、ほとんど顧みられることがなかった「神の自由」の問題について考察をしたことを述べてきた。むろん、そのことは、アウグスティヌスが、ペラギウス主義の批判を試みる中で、「神の自由」ということを発見した、というような意味で理解されることは好ましくない。「神の自由」は、創造主である神という存在が、人間という被造物を超えた存在である限り、ある意味で、自明のことである。ただ、人間が神によって一方的に救済されるという局面において、神の恩恵として現れる

「神の自由」の問題は、晩年のアウグスティヌスにとって主要な関心となっていたことは記憶に留めておかなくてはならない。もちろん、この「神の自由」ということに関しては、その自由の有する、いわば「深淵」について、併せて思い巡らす必要があることも次の聖書の言葉と共に忘れずにおきたいと思う。

「ああ神の知恵と知識が有する富は何と深いことか。神の裁きは何と窮めがたく、その道は何と計り知れないことか。誰が主の心を知っていたであろうか。誰が主の相談相手であったろうか。誰がまず主に与えて、その報いを受けるであろうか。なぜなら、すべてのものは神から出て、神によって保たれ、神に向かっているから。栄光が神に永遠にありますように。アーメン」（「ローマの信徒への手紙」第11章3—36）。

## 註

（1）「書簡」186 及び「書簡」194 の日本語訳については、『アウグスティヌス著作集 別巻Ⅱ』所収（2013年、教文館、金子晴勇訳）による。

（2）ペラギウス及びその主義者との論争の分類については、宮谷宣史『人類の知的遺産15 アウグスティヌス』（1981年、講談社）を参考にした（とくに、pp. 202—220）。



## Augustine on God's Freedom in Letter 186 and Letter 194

Kikuchi, Shinji\*

「書簡」186と「書簡」194は、いずれも416年から418年の間にかけてアウグスティヌスによって執筆された作品であり、両者とも、ペラギウス主義の問題点について扱っている。

アウグスティヌスによれば、人間の本性は、原罪によって著しく損なわれ、救済されるためには、人間の自由意思は単独では何ら有効な働きをすることは不可能であり、神の恩恵が先立ち、また、神の恩恵が共に働くことによってはじめて、救済への道が開かれる。ペラギウス主義は、人間の自由意思の働きをきわめて肯定的に捉え、恩恵を、いわばその補助手段的に捉えることにより、人間の側からのみ自由を理解しようとしたが、そのために、創造主である神の領分を十分に扱うことができず、神の側から神の自由を考察することには失敗したと言える。

キーワード：自由意思、恩恵、神の自由

